

Scandal at Scotland Yard  
1969  
by Belton Cobb

目次

ある  
醜聞スキヤンダル

5

訳者あとがき

201

## 主要登場人物

- ブライアン・アーミテージ……………ロンドン警視庁の警部補  
キティー・アーミテージ……………ロンドン警視庁の部長刑事。ブライアンの妻  
バグショー……………ロンドン警視庁の警視  
チェビオット・バーマン……………ロンドン警視庁の警視正  
サム・バーケット……………ロンドン警視庁の巡査部長  
エルシー・バーケット……………サムの妻  
ペギー・ソーンダーズ……………ロンドン警視庁の巡査。バグショー警視の秘書  
カーステアズ……………ブライトン警察の警視正  
メイツ……………ブライトン警察の警部補  
チャールズ・ルツカー……………ホテル支配人。元警官  
ライアート夫妻……………ホテルの宿泊客  
ウイナント夫妻……………ホテルの宿泊客  
クラークソン夫妻……………ホテルの宿泊客

## 第一章 警察官の私生活

### 1

「『人は微笑みながら悪人になることができる』という名台詞（ゼリフ）があつたよね（ハムレット）」  
「わたしは尋ねた。「何も、われらがバグショー警視を悪人と決めつけているわけじゃないが、奴の笑顔には心がない。あいつは卑劣なことをしておきながら、立派な人間だとほくたちに思わせるために作り笑いをしているのさ」

「彼は微笑んだりしないわ、ブライアン」妻のキティーが言い返す。「目くばせをするだけよ。そしてときどき目を細めるの」

「それだつて微笑みに変わりはない」わたしは言い張った。「つまりはインチキだつてことさ。害を与えない人物だと容疑者に思わせるのに、きつと便利なんだ。だが部下にはそんな顔を見せるわけにはいかない。目くばせをして、このアーミテージ警部補に命じるんだ。あたかも信頼できる警官と見なしていてもいいように。それでいて昇進したての巡査部長並みに、次の捜査

段階に入る前に逐一報告させたがるんだから。もうあいつにはいい加減、うんざりだよ、キティ  
ー

「気持ちわかるわ。だからってやけになっちゃだめ。彼は上司なんだから。喜んで彼の言うことに従っているふりをしなくちゃ。でなきゃ治安維持機関でお先真つ暗よ」

わたしは不平を言った。「先があるとしても、奴はぼくが実力を発揮する機会をこれっぽっちも与えてくれない。奴の下じゃ、優秀な刑事だろうが役立たずだろうが関係ないんだ。他の上司につくためなら、なんだってするよ」

## 2

わたしが十年ほど前にスコットランドヤードのロンドン警視庁に入ってからずっと直属の上司だったチェビオット・バーマンは、警部補から警部、そして警視と出世していった。その間、わたしはキティー——当時はパルグレーヴ女性捜査部巡査——と結婚し、バーマンの個人秘書となった。わたしを気に入ってくれてのことだろうが、とりわけキティーに目をかけていたからだと思う。かくしてわたしは警部補に昇格し、キティーは部長刑事となった。

わたしたち——バーマン、キティー、そしてわたし——はこぢんまりとしたチームとなり、たいてい一緒に働いた。そして庁内の当局——キティーはお偉方と呼んでいる——はバーマンを警視正にし、ひとつの班だけでなく四つの班の長とした。それが結局わたしたちのチームを解散さ

せた。早すぎる出世の結果バーマンは決裁処理に追われることとなり、キティーやわたしの担当する現場捜査にかかわれなくなったのだ。わたしたちはB班に残り、上司になったのが……例の憎き目くばせ男というわけだ。

彼の部下として辛いのは、キティーの指摘を思い知らされることだ。わたしの進退はバグシヨ―警視次第で、わたしにはなす術がないのだ。

### 3

当時わたしはサセックスのイーストグリンステッドで起きた事件の捜査をしていた。バグシヨ―は言うのだ。「欲しいのは証拠だよ、アーミテージ警部補。容易にとはいかないだろうが、探しているうちに見つかるはずだ。だからこそ、突破口が見えるまであらゆる手段を講じて、八方手を尽くして探すんだ。わかるな？　そして何をするにせよ、あからさまにするな、さもないと感づかれて犯人が逃げてしまう。いいな？　当然ながら成果の有無にかかわらず定例報告をすること、そうすればきみの捜査内容を把握して次の指示を与えられるからな」

いつものように彼はわたしを管理する。バグシヨ―はすべてを掌握したがる悪い質たちなのだ。

だが、今回の事件では、彼の予想より早くわたしは証拠を見つけた。おおかたバグシヨ―のことだから、わたしが証拠を見つけたのはたまたま運が良かったのだと言ったのではないだろうか。せいぜい証拠によく気づいたと褒めてくれる程度だ。お褒めの言葉すらないこともある。だが今

回わたしは冴えていた。ふたりの男の会話をたまたま聞いたわたしは、その内容の当たり障りのなさにむしろ違和感を覚えて調査を始め、手がかりを見つけて事件の全容をつかんだのだ。二、三日後に証拠をつかむと、最終的にはギャングのアジトを強制捜査するために地元警察の協力が必要となったのである。

地元の警視と早急に連絡を取ると、先方も迅速な対応をしてくれた。わたしが見つけた手がかりを伝えただけで、同日の夜には合同での強制捜査となった……というより、バグショーの管理下でなければ、強制捜査となるはずだった。チェビオット・バーマンの下で働いていたなら捜査が先で、報告は後にしただろう——「五人全員を収監しました」——するとバーマンはわたしの背中を叩いて「でかした、ブライアン……上出来だ」と言ってくれ、捜査員全員が満足感に浸れたはずだった。だがバグショーだとそうはいかない。わたしがさしあたり彼への届出書なしで済ませようとしても、彼に直接会って全証拠を提示し、彼の判断を待たねばならない。ギャングに逃走させないようにするにはスピードが勝負なのは明々白々だ……少なくともそれが一番重要なのだが、バグショーにとっては、自分が強制捜査を許可することが何よりも重要なのだ。

それが金曜日の午後となるとさらに話が厄介だ、というのもバグショーが週末には遠方で休暇を過ごすことを知っていたからだ。だから彼が庁を出る前にかまえなければならなかった。つまり、わたしがイーストグリンステッドから戻るまで彼に待ってもらおうよう電話で伝える——というより、頼む——必要がある。

だがわたしが電話をかけてバグショーに繋いでくれと頼むと、巡査部長はこう言った。「あい

にくですが、フライト警部に任を引き継いで休暇に行かれましたよ。仕事を早めに切り上げて三十分前に署を出ました」

これには面食らった。バグショーが言う「あからさま」なことにならぬよう、細心の注意を払って捜査はしているが、わたしの内偵が漏れる可能性は常にあり、そうなるとう容疑者は潜伏してしまうのだ。強制捜査を遅らせると月曜日には逃げられてしまうかもしれない。それに、わたしはわたしなりにハードな一週間を送っていて、日曜日にはキティーと寛いで英気を養うことを心待ちにしている。だから——とどのつまり公私両面を考えて——迅速な行動を取る必要があった。だが目下のところ、上司の承認なしには、警部補としてのわたしの任務は果たせない。

すっかり頭に血が上り、口に出すのが憚られるようなことしか頭に浮かばない。すると巡査部長がこう尋ねた。「フライト警部にお繋ぎいたしますか？」

フライトは好人物である……いふなれば心優しく威張り散らしたりしない一市民だ。しかし彼には欠点がある——それゆえ警部に留まり続け警視になれない——事なかれ主義なのだ。

わたしの報告を聞くと彼は言った。「なるほど、わかった。きみの言う通り緊急対応案件だ。だがあいにくバグショー警視が不在でね」

「どうか警部がご指示を」わたしは言った。

「バグショー警視の案件をいくつか引き継いでいるが、本件は受けていない。何も聞かなかったから、警視は急展開を予期していなかったのだろう」

「わたしが機転を利かせたからこそ急な展開になったわけでした。すぐにでも動いて犯人の不意



を打つ必要があります」

「きみの言う通りだ。月曜日にバグショー警視が戻り次第……」

「先延ばしするのはあまりにも危険です」わたしは言った。「ぜひ強制捜査の許可を……」

「そう言われても案件を知らないのですね。バグショー警視が指揮を執りたがるのをきみだつて知っているだろう」

こうなつてしまうと、フライト警部は処置なしだ。だからわたしは言った。「おっしゃる通りですね。バグショー警視はどちらに行かれたのです？ 行く先をご存じですか？」

「サセックスコーストのベルディーンだ。ザ・ベルボイ・ホテルだよ」フライトの声が和らぐ。

「きみがイーストグリンステッドにいるなら、車で会いに行けるだろう。警視が到着したらすぐ会えるはずだから、経緯を報告して警視の指揮のもと強制捜査を行えばいい」

4

なるほど、言う通りだ。それにバーマン——四つの班の長わき——に電話をしても構わないわけだ。彼なら、警視正がかかわっている案件でも何でも指示を下せる。だが権限はあるが、実際には指示を出さないだろうとわたしは思った……というのもバーマンには新たな案件だということもあるが、彼は——バグショーと違い——署員たちに自由に捜査をさせ——特に直属の部下には——事件を任せるからだ。バグショーにはぬかりなく対応せねばならない。電話で伝えるよりベルデ

イーンへ行こうと決心した。彼が着いたすぐ後にわたしが到着すれば、話もすぐに済むはずだ。かくしてわたしはブライトンへ車を走らせ、ベルデイーンを目指して海岸線を進んだ。ベルデイーンはこぢんまりした観光地で、わたしも子供の頃には休暇を過ごしたところなので、再び訪れるのは楽しみだった。高層ビル群を除けば、十五年の時を経てもほとんど変わっていない。途中、パブに立ち寄って飲み物とサンドイッチを取り、ザ・ベルボーイ・ホテルが四百メートルほど内陸に位置していると教えてもらった。引き続きハンドルを握りながら、池のある美しい草原に目をやる。学生時代にも見た覚えがある風景だ。

いまから思えば、運転中は景色に見とれるより道路に注意を払うべきだった。

若い女性が急に歩道から飛び出してきた。何とかハンドルを切り、女性を避けた——幸いにも女性も瞬時に車に気づいて後退ったが、急に体勢を変えたせいでバランスを崩した。わたしが急ブレーキをかけて停車すると、女性は道路に尻餅をついていた。

一瞬、女性を轢いたと思った。わたしは車から飛び出して女性のほうに身を屈めた。「大丈夫ですか？」わたしは強く呼びかけた。「怪我はありませんか？」

「大丈夫です」女性は応えた。「車に当たったんじゃないやなくて転んだんです。どこも怪我をしていません——お尻をひどく打ちつけたくらい」

「医者まで車で送りますよ」わたしは提案した。

「打ち身くらいで？ そんな大げさな」女性は急いで立ち上がると、身体のおつけた箇所を調べ始めた。あらぬ誤解を受けぬよう、わたしは見守るだけにしてしたが、女性が実に均整の取れた

プロポーションだとわかった。

「触ると少し痛いわ。でも一日か二日で痛みは治まりそうです。そういうことになっておかないや。とにかく今夜が肝心なんだから」

女性はわたしに話しかけているというより自分に言い聞かせているようだ。「今夜、何かあるんですか？」わたしは尋ねた。

女性は改めてわたしに気づいたようにこちらに向き直った。何も彼女がはにかんだというつもりはないが——いまどきそんな娘はいないだろう？——少し面食らった様子だった。「ええ」女性はやった。「今夜はとて、大切なことがあるんです」

5

わたしはずっと女性の顔を見ていた。魅力的な女性だ。二十歳か二十一歳といったところか。その顔にどこか見覚えがあり、わたしは言った。「前にお会いしましたよね？ どこかで一緒にしませんでしたか？」

女性は言った。「あら、お会いしたことありませんけど」

それでもわたしは思い出そうとした。確かに見たことがある顔だ。「わたしはチェルシーに住んでいます。その近辺にいらしたことは？」

「いいえ、ありません。お会いするのは初めてです」

なぜ女性が言い張るのかわからなかった。だが明らかに動揺……そう、動揺しているのだ。わたしは微笑みながら言った。「そうおっしゃるならしつこく言いませんが」それから——なぜそんなことを思いついたか自分でも不思議だが——こう尋ねた。「治安維持機関にお勤めでは？」

女性はすぐに面食らった表情に戻って、こう言った。「とんでもない、警察とは何のかわりもありません」

「じゃあぼくの勘違いですね。とにかく、打ち身を作らせてしまつて本当に申し訳ない。何か力になれませんか。歩くのも辛そうじゃありませんか。とりあえず、あなたの家まで送らせてください」

それを聞いて女性が頬を緩めた。「いえ、住んでいるのはこの辺りじゃなくてロンドンです。ここには週末に来るくらいで」女性は転んだ時に落としていた小さなスーツケースを持った。「プライトンからのバスで来ました。ちょうど降りて歩いていたところです。目的地までそう遠くありません」

「そこまで車で送らせてください」わたしは提案した。

「そうですね」女性はあいまいに言った。「お言葉に甘えようかしら？ 転んでから少し痛みがあるし、今夜にきちんと備えておきたいので。どうしても気を抜けないんです」

女性が助手席に乗り込む。わたしは行く先を尋ねた。

「ああ、ベルボイというホテルです」女性が言った。

キティーに言わせると、わたしは頭の回転が速いほうではないそうだ。自覚はないが、うわの空で大事な点を見逃ごして数分後に気づくことがあるのは事実だ。遅まきながら気づいたが、女性に治安維持機関にいるかと尋ねた時、女性は「どの治安維持機関ですか？」と聞き返さず、わたしが警察を指しているとすぐに理解していた。一般的に言って、普通の市民なら説明されないと警察とは気づかない。だがこの女性は知っていた。どうしてわかったのだろうか？

わたしは少し考えているうちに、以前女性と会った場所を思い出した。かろうじて面識がある程度だが、彼女はバタシー西地区から異動してきたロンドン警視庁の婦警だ。名前はペギー・ソーンダーズ、バグショーの秘書として赴任してきていた。

今度はわたしが面食らった。こちらが気づいたのだから、彼女だってわたしに見覚えがあるはずだ……廊下や食堂、それにバグショーの執務室で。なのにわたしをまったく知らないと言い、そのうえ警察勤務を否定した。

彼女が「匿名」を通したいならわたしがどうこう言う筋合いはない。取り立てて問い質す氣に

もなれなかつた——そんなことをすれば彼女を嘘つき呼ばわりするも同然だ。おまけに……

なぜ彼女はそんな真似を？ 火を見るよりも明らかではないか？

彼女は週末をベルボイで過ごす……それも台無しにできない週末で、しきりに「備えておく」ことを気にしている。そして彼女は面食らつた様子だ。なるほど。どのような週末か察しがついた！ あたかも父親のように彼女の膝を軽く叩き——わたしより十歳ほど若いだろう——「さあ夜を楽しんできなさい！」と言いたいくらいだった。が、差し控えた。

代わりにさらに考えを巡らせた。彼女はザ・ベルボイ・ホテルへ行く。その場所こそバグショーの週末の避暑地だ。そして彼女は彼の秘書である。手を尽くして配下に異動させるほど、バグショーは彼女を気に入っているに違いない。

彼は独身だ。確か三十歳代後半である。彼の私生活はベールに包まれている。だが四十歳近くの独身男性が、このように魅力的な容姿の秘書に入れ込むのは至極当然なこと……そして恋愛感情が高まり、ペギー・ソーンダーズに「今夜は大切なことがあるんです」と言わせるわけか？

考えを巡らせていた時、彼女が言った。「ここです——ザ・ベルボイ・ホテル」

わたしは後部座席に手を伸ばし彼女のスーツケースを取り、運んでやろうとしたが、そうすべきでないと感じた。彼女と共にホテルに入ったら、せっかくの再会を楽しみにしていた恋人たちの逢瀬をぶち壊しにしてしまふではないか？ バグショーだつて警視庁の者との場に居合わせたくないに決まっている！

それに厄介な点がある。わたしが彼女と一緒にいるところを彼が見たら、わたしたちが知り合

いだと思い——わたしと面識がなく警察ともかわりがない、とミス・ソーンダーズが言ったとは知る由もない——なぜ黙っていたのだと彼女は罵られるだろう。彼の腕の中に飛び込むはずが当てが外れた、と彼女は面食らう。そしてバグシヨー自身も、面食らう歳でもないとしても烈火のごとく怒るはずだ……誰よりもわたしを毛嫌いしているのだから。

そう、決して彼女とホテルに入ってはならない。

そこでわたしはスーツケースを彼女に渡すと、お大事に、と笑みを浮かべて言い、車を走らせた。

## 8

しばらくして厄介なことになったと気づいた。というのもわたしはバグシヨーに会わなくてはならないし、いまから就寝するまでの間に機会をうかがって会うとしても、どうにもお互いばかりが悪くなるからだ。三十分以内に会えば、お忍びの彼らの夕食の邪魔をしてしまおうし、夕食後にすると、ふたりがいいムードになったところへ水を差すことになってしまう。それ以上待てば……そう、身も蓋もない結果になりそうだ。イーストグリンステッドでの強制捜査に関する件で指示を受けるのは正直言つて、今日は無理だ——どうしても。

わたしにできるのはイーストグリンステッドに戻つてその場にいる警視に会い、調査結果を報告して、うちの上司の指揮下の強制捜査の準備を整えるようにすることだ。それから明朝、ベル

デインに在るバグショーに会いにゆけばいい。おそらくその時には彼はすこぶる元気で、満足に浸っているはずだ。休暇をわたしに邪魔されて悪態をつくだろうが、運がよければミス・ソーンダーズとは会わないで済むし、彼らの逢瀬に知らんぷりを決め込める。

そういうわけで、わたしはイーストグリンステッドへ引き返し、管轄の署で帰り支度をしていたスミザーズ警視を何とかつかまえた。最初は話がうまくかみ合っていた。わたしの捜査を彼は褒めてくれた。だが警視に「よし、直ちに出勤して日付が変わる前に全員拘置所にぶち込もう」と言われた時、わたしは「残念ですがそれはできません。ぜひともそうしたいのですが、現段階では指示をもらっていないので」と言うよりほかなかった。

警視はわたしを凝視した。「ならどうしたい？ 時間を置くのか？」

「実質そういうことになります。明日まで指示を得られないので」

「わたしの指示では不十分かね？ うちの管轄のギャングの犯行に関する情報をわざわざ持ってきてくれたから指示を出そうとしているのに」

わたしはひどく肩身が狭かった。「それはごもつともです」わたしは言った。「ですが本件に関しては証拠を得た時、上司に報告すると命じられています。まだ報告できていないのです、週末の休暇に出ています。上司の許可無しでは捜査を進められません」

「なんてことだ！ 警視庁はそんなに手続きに時間がかかるというのか？ きみの上司の副官はいないのかね？」

わたしはフライト警部についてなんとか説明した。だがスミザーズ警視は意に介さなかった。



「ばかばかしい！」彼は言った。「とにかく警部補、きみは捜査手順を把握しているようだから、行動したほうがいい。上司がきみをなじるとでも？」

「命令に逆らうことになりませんので」

「ひどい命令だ」警視は言った。「筋が通らない。きみは警視庁からここへ転属してきたほうがいい。わたしなら任務と十分な権限を与えてやれる。目下のところ対処すべきはきみの上司のようだ」

警視は受話器を手渡した。「連絡先は知っているんだらう？　なら電話して指示を受ければいい。上司が騒ぎ立てたらわたしは電話に出て文句を言ってやる」

その案はとても気に入った。だがわたしにできるはずもない。バグショーとミス・ソーンダーズが夕食後にいい雰囲気になっていくかもしれない。そして——「今夜はとても大切なことがあるんです」と言っていた様子からすると——彼女はわたしの電話は望んでいない。だから連絡を取るなら夜の早い時間にするしかない。その場合、ベルボーイがドアをノックしてミスター・バグショーにお電話です、と伝える時点で不愉快にさせるだろう。電話口に出る頃には怒り心頭でわたしの話など耳に入るまい。

だからこそ、バグショーに低姿勢で伝えられるよう、入念に準備しているのだ。わたしだってそんな時に邪魔などしたくない！

かと言ってスミザーズ警視に何もかも説明するわけにもいかない。

わたしは言った。「もちろんですとも。ごもつともです。ただバグショー警視は今夜は干渉し

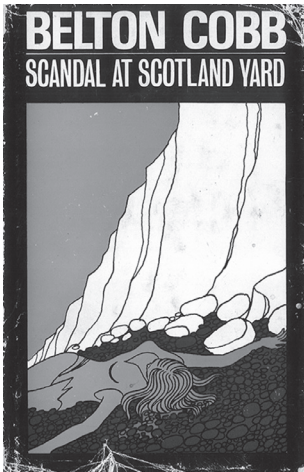
ないでくれと念を押していました。わたしとしては——上司は何か特別な事情を抱えていて、それに専念したいと思いい——集中を妨げる行為は避けてほしいのでは、と」

警視は鋭い。「きみが賢いのか愚鈍なのかわからんよ、警部補。話を聞いているときみの上司は新婚旅行にでも行っているようだ。『夜に電話してくるな』なんて言うのはそんな状況しか思いつかない」

わたしだってそう思う。バグショーに共感はできないが……たしなみのある者ならこのような状況にふさわしい行動をするのだろう。わたしが推理した内容をスミザーズ警視に認めてもらえるかどうかわからない。結局、男と女のことは当人以上首を突っ込むことではないのだし、しとねに共にいる間は聖域と見なしてやるものだ。とやかく言うのは起きて日常に戻ってからでいい。だからわたしはスミザーズ警視に言った。「新婚旅行かどうかはまったくわからないです。結婚のお祝い金も徴収されていませんから、ご意見には賛成しかねます。ですが、邪魔されたくない、と言っていたのは確かですから、彼の命令には逆らわないほうがいいのではないのでしょうか？ ギャングのほうは見張りをつけてもらえば、明日には逮捕できるはずですよ」

訳者あとがき

本作『ある醜聞』スキャンダルは、英国のミステリ作家ベルトン・コップが一九六九年に発表した“Scandal at Scotland Yard”の邦訳です。



Scandal at Scotland Yard (1969, W. H. ALLEN & COMPANY LTD.)

スコットランドヤード  
ロンドン警視庁の中堅刑事として働くブライアン・アーミテージ警部補が活躍する本作は、若き女性職員の非業の死を軸にして物語が展開されます。事件の背景に警視庁内の醜聞が関わっていると信じるアーミテージ警部補が、女性職員を死に至らしめた犯人を捜査すると同時に、醜聞に対して穏便な幕引きを図ろうと孤軍奮闘する警察小説です。

事件が起こり、犯人を捜すという筋立てに加え、醜聞や内部告発という日常的な事柄が織り込まれているので非常に読みやすい展開ですが、ミステイレクションが多く盛り込まれ、入念に作

〔著者〕

ベルトン・コップ

本名ジェフリー・ベルトン・コップ。1892年、英国ケント州生まれ。ロンドンのロングマン出版社の営業ディレクターとして働いたかわら、諷刺雑誌への寄稿で健筆をふるい、特にユーモア雑誌「パンチ」では常連寄稿家として軽快な作品を多数執筆した。長編ミステリのほか、警察関連のノンフィクションでも手腕を発揮している。1971年死去。

〔訳者〕

菱山美穂（ひしやま・みほ）

1965年生まれ。英米文学翻訳者。主な翻訳書に『運河の追跡』、『盗聴』（ともに論創社）など。別名義による邦訳書もある。

スキヤンダル  
ある醜聞

——論創海外ミステリ 245

---

2019年12月20日 初版第1刷印刷

2019年12月25日 初版第1刷発行

著者 ベルトン・コップ

訳者 菱山美穂

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル  
TEL:03-3264-5254 FAX:03-3264-5232 振替口座 00160-1-155266  
WEB: <http://www.ronso.co.jp>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

---

ISBN978-4-8460-1875-7  
落丁・乱丁本はお取り替えいたします